棕櫚の主日説教（2026 年 3 月 29 日）

説教者：中村信哉

# 悲しみの人

イザヤ書 53 章 1-6 節

**はじめに**

イザヤ書 53 章は、イエス様が生まれる数百年前に書かれたものですが、イエス様の生涯を預言したものとして、新約聖書は理解しています。イエス様の生涯は決して華やかなものではありませんでした。それは苦難に満ちたものでした。そのイエス様の苦難を預言しているのが、イザヤ書 53 章です。

## 1. イエスの姿

1 節に**「私たちが聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕はだれに現れたか」**とあります。イエス様は、神であり、救い主キリストとしてこの世にお生まれになった方です。しかし多くの人は、イエス様を信じなかったのです。それは、多くの人が期待するような姿や生涯ではなかったからです。イエス様が生まれた当時のユダヤ人たちは、ローマ帝国に支配されていました。そのような中で、救い主キリストを待ち望んでいたのです。多くの人は、ローマ帝国から解放してくれる力強い救い主キリストを待ち望んでいたのです。

しかし実際のイエス様はどうだったのでしょうか。2 節を見てみましょう。**「彼は主の前に、ひこばえのように生え出た。砂漠の地から出た根のように。彼には見るべき姿も輝きもなく、私たちが慕うような見栄えもない」**。イエス様は、「砂漠の地から出た根」のように、弱々しい姿だったのです。人々が見とれるような輝きも、人々が慕うような見栄えもなかったのです。イエス様は、飼葉桶で生まれ、ガリラヤのナザレという田舎町の貧しい大工の子として育ちました。イエス様には、ひと目で救い主キリストと分かるような外見は、全くなかったのです。ただイエス様は、「主の前に」とあるように、「神様の御前」に生きていたのです。たとえ、人々が見とれるような輝きも、人々が慕うような見栄えもなかったとしても、神様に従い、ひたすら「神様の御前」に生き続けたのです。

## 2. イエスに対する人々の扱い

そのようなイエス様を、人々はどのように扱ったのでしょうか。3 節を見てみましょう。**「彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。人が顔を背けるほど蔑まれ、私たちも彼を尊ばなかった」**。人々は、イエス様を受け入れず、人が顔を背けるほど激しく蔑み、のけ者にし、尊ばなかったのです。それは、イエス様には人々が期待するような輝きも見栄えもなく、イエス様を神また救い主キリストと信じなかったからです。イエス様はその意味で、多くの「悲しみ」を知っていたのです。人から蔑まれる悲しみ、人からのけ者にさ

れる悲しみ、人から尊ばれない悲しみを知っていたのです。イエス様は、そういう多くの悲しみを経験した「悲しみの人」であったのです。

### 3. <u>イエスの働き</u>

では、イエス様はその生涯において、どのような働きをされたのでしょうか。4-5 節には、イエス様の生涯における働きについて書かれています。まず 4 節を見てみましょう。**「まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」**。新約聖書のマタイ 8：16-17 には、このイザヤ書の御言葉が引用され、次のように書かれています。**「人々は悪霊につかれた人を、大勢みもとに連れて来た。イエスはことばをもって悪霊どもを追い出し、病気の人々を癒やされた。これは、預言者イザヤを通して語られたことが成就するためであった。『彼は私たちのわずらいを担い、私たちの病を負った』」**。イエス様が、「私たちの病を負い、私たちの痛みを担った」ということは、人々の病気を癒やし、人々から悪霊を追い出したということです。イエス様は、「悲しみの人」でした。それゆえ、病気や悪霊につかれて苦しみ、悲しんでいる人に寄り添い、彼らに仕え、彼らを癒やされたのです。イエス様は、その生涯において、権力のある人々と関わられたのではなく、弱さのある人々と関わり、彼らと共に歩まれたのです。

では、イエス様の生涯の最後はどのようなものだったのでしょうか。4 節後半から 5 節を見てみましょう。**「それなのに、私たちは思った。神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれたのだ。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、その打ち傷のゆえに、私たちは癒やされた」**。

人々は、イエス様が「神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと」思ったのです。それは、イエス様が十字架で殺されたからです。旧約聖書の申命記 21：23 に、**「木にかけられた者は神にのろわれた者だからである」**とあるので、二つの木が十字に組み合わされた十字架で殺されたイエス様は、まさに神に呪われた者だと人々は思ったのです。人々は、イエス様が何か大きな罪を犯したから、神に呪われたのだと思ったのです。またイエス様を十字架で殺した人たちは、イエス様が「自分こそ神であり、救い主キリストである」などと言って、神を冒瀆したため、神に呪われて死ぬべきだと思ったのです。しかしイザヤ書 53 章は、イエス様が十字架で死なれたのは、自分の罪のためではなく、「私たち」の罪のためであると語っているのです。イエス様は、「私たち」の背きのために、十字架で刺され、「私たち」の咎のために、十字架で懲らしめられたのだと語っているのです。

### 4. <u>イエスと私たち</u>

イザヤ書 53 章は、「彼」という言葉と「私たち」という言葉が繰り返されています。つまり、「彼」と「私たち」は決して無関係ではない、「彼」と「私たち」は関係があるのだと訴えているのです。つまりイエス様と私たちは、関係があるのだと、イエス様の生涯と私たちは関係があるのだ、イエス様の十字架の死と私たちは関係があるのだと訴えているのです。イザヤ書 53 章で、イエス様は「彼」として描かれ、人々が見とれるような輝きも、慕

うような見栄えもなく、むしろ人々から蔑まれ、のけ者にされ、尊ばれなかったと語られています。またイエス様は、人々の病気を癒やし、人々を悪霊から解放し、人々の弱さに仕えられたのに、人々はイエス様を神に呪われた人として十字架につけて殺してしまったと語られています。

では、そのようなイエス様に対して、「私たち」の姿はどのように描かれているのでしょうか。1 節には、私たちは誰も信じなかったとあり、2 節には、私たちはイエス様を慕わなかったとあり、3 節には、私たちはイエス様を尊ばなかったとあります。そして 4 節には、私たちは、イエス様が自分の罪のために、神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと思ったとあります。つまり私たちは、自分とイエス様は、無関係だと考えたのです。そして、イエス様を慕わず、尊ばず、信じないというのが、私たち人間の姿なのです。

6 節には、**「私たちはみな、羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行った。しかし、主は私たちすべての者の咎を、彼に負わせた」**とあります。イザヤ書 53 章に出てくる「背き」とか「咎」というのは、「罪」のことです。では、罪とは何でしょうか。それは、「羊のようにさまよい、それぞれ自分勝手な道に向かって行くこと」です。神様のもとを離れて、自分勝手に生きることです。神様の律法に従わずに、自分の欲望に従って生きることです。神様の道ではなく、自分の道を歩んでいくことです。そしてその結果、私たち人間は、神様がこの世に遣わされた救い主であるイエス様を、慕わず、尊ばず、信じず、自分とイエス様は無関係だと考えたのです。このような私たち人間の姿を、聖書は、「罪」と呼ぶのです。

神様は、義なる方であるがゆえに、罪を正しく裁かれる方です。罪を決して見過ごしにはできず、罪を罰し、打ち、苦しめなければなりません。また罪を刺し、砕き、懲らしめ、その罪の責任を負わせなければなりません。しかし同時に、神様は愛なる方であるがゆえに、私たちに救いの道を用意される方です。罪は決して見過ごしにはできませんが、私たちを救おうとされたのです。その解決が、イエス様の十字架にあるのです。「主は私たちすべての者の咎を彼に負わせた」とある通り、私たちのすべての罪を、イエス様に背負わせ、私たちを罰する代わりに、イエス様を罰し、イエス様を打ち、苦しめ、刺し、砕き、懲らしめることを通して、私たちを神様の裁きから救おうとされたのです。

イエス様ご自身も、「主の御前」に生き、十字架において、私たちの背きのために刺され、私たちの咎のために砕かれてくださったのです。イエス様は、私たちの罪の責任を負い、私たちの代わりに、神様に裁かれてくださったのです。二千年前に起こった、あのイエス様の十字架の死は、決して私たちと無関係ではないのです。イエス様の身代わりの死が、私たちに平安をもたらし、私たちを癒やすのです。私たちの心は、神様との「平和」を回復する時に、平安が与えられ、癒やされるのです。私たちの心は、羊のようにさまよっている時は、平安もなく、癒やされません。私たちの心は、羊飼いである神様のもとに帰る時に、平安を与えられ、癒やされるのです。

**<u>おわりに</u>**

１節に、「私たちが聞いたことを、だれが信じたか」とあるように、多くの人は、このことを信じません。多くの人は、イエス様が神であり、救い主キリストであることを信じません。そして、イエス様の十字架の死が私たちの罪のため、私たちの身代わりであったことを信じません。イエス様と自分は無関係であり、イエス様は、歴史上の一人の人物に過ぎないと考えます。

私たちはどうでしょうか。私たちは、このイエス様を、神と信じ、私たちの罪の身代わりに十字架で死んでくださった救い主と信じるでしょうか。それとも多くの人と同じように、信じないでしょうか。信じる人だけが、神様の裁きから救われ、神様と和解し、平安を与えられ、癒やされるのです。

私たちクリスチャンは、イエス様と同じように、「主の御前」に生きることを学ばなければなりません。イエス様は、「主の御前」に生きるがゆえに、人々が見とれるような輝きも、人々が慕うような見栄えも持ちませんでした。また権力を持つ者と共に生きるのではなく、弱さを持つ者と共に生きられたのです。そして「悲しみ」と「病」を知っていったのです。

いつの時代も、私たち人間は、見とれるような輝きを、慕われるような見栄えを、そして人々から尊ばれることを求めていきます。しかし私たちは、そのような生き方が、本当に「主の御前」で生きることなのかどうかをもう一度考えなければなりません。「主の御前」で生きるとは、「悲しみ」と「病」を知っていく道です。「弱さ」と共に生きていく道です。「悲しみ」を知れば知るほど、「病」を知れば知るほど、「弱さ」を知れば知るほど、私たちは、イエス様の姿に近づいていくことができるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたが遣わされた救い主は、人々が期待するような姿ではありませんでした。あなたが遣わされた救い主は、悲しみの人であり、病を知る人でありました。そして弱さと共に生きる人でした。人々は、見とれるような輝き、慕われるような見栄えを求め、人々から尊ばれることを求めていました。しかし、そのため、イエス様を神であり救い主キリストと信じることができませんでした。

私たちがどうかイエス様と共に、「主の御前」で生きることができますように。そして、悲しみを知り、病を知り、弱さを知ることによって、イエス様がはっきりと見えるように、イエス様をはっきりと信じることができるようにしてください。そして、私たちも悲しみの人として、病と弱さを知る人として、イエス様の姿に益々近づくことができますように。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。